

# 地

方消滅」という衝撃的な言葉の登場とともに、地域づくりの分野でも「選択と集中」という考え方が当たり前になった。「選択と集中」を一言で言うとは、得意なことを伸ばし、それ以外は切り捨てろということになる。「地方消滅」を指摘した増田レポートは、極論すると、「選択と集中」で中核都市が得意なことを伸ばして人口を集め、捨てるところは捨てて、地方は生き残れということになる。

「選択と集中」にはリスクがある。主なリスクは適切に「選択」できるか、どのくらい先の未来の想定が可能か、であろう。間違った分野への「集中」は、取り返しがつかない失敗につながるかもしれない。特定分野への先鋭化は、社会環境の変化に適応できない危険性をはらむ。ビジネスの世界では、五年先を見て「集中」し、情勢をみてまた「選択と集中」で対応すればよいかもしれない。しかし、地域政策としては長期的視点が不可欠で、いまの「選択と集中」が将来も妥当であるかを判断することは容易ではない。

私は、農村計画学を専門としている。最近はその地域の再生可能エネルギー資源を賢く使うことで、「富」を地元で落とすとして農山村を豊かにする方策の研究を主要なテーマとしている。学生の多くは、バイオマス、太陽光に興味をもつようであるが、私自身は小水力に興味がある。水源地域における環境・資源管理、長い歴史の中で

## 各 人 各 説

# 農山村の持続と再生可能エネルギー

茨城大学 農学部 教授

## 小林 久

Hisashi Kobayashi



蓄積された水利のハードとソフトの継承に関心があるからである。

わが国は、二〇五〇年までに温室効果ガス排出を八〇%削減するという目標を定めた。再生可能エネルギーの導入拡大は必至といえる。その供給拠点は、水力・風力や森林資源に恵まれ、広い空間のある農山漁村で、そこはエネルギー資源供給の戦略地域と位置づけられることになる。私は、そのような地域の持続戦略をコミュニケーションレベルで示したい、と考えている。

具体例をあげる。峠越えの道路があり、都市住民ごひいきの林産物が採れるところに高齢者が住む二戸が残る集落がある。度々、若者も支援に来る。このままだと十年以内に集落は消滅する。しかし、ここに若い世代が二世帯定着すれば、集落はまだ数十年維持できる、と私は思う。路肩の草刈り、水路・山道や美しい石積み維持も続く。この集落で十分な所得が保証され、若者が興味をもつ仕事を創出できれば、若い二世帯の定着も夢ではない。

「選択と集中」の対抗軸に「多様性、分散、回帰」という考え方があふれる。全面的に賛同するわけではないが、少しの失敗ならば受け入れられるという強靱な地域形成に、多様性を活かす「分散」は役立つと思う。「回帰」による若い二世帯の定住実現に、再生可能エネルギー開発が解決の糸口とならないか、とも考える。その探求が、私の課題である。